※今日から我が家は騒がしいスペシャル
（後編）

○登場人物

○森川京太郎（４７）
○佐田真澄（５０）
○森川渉（１８）
○森川さくら（１５）
○桂川斗馬（３１）
○タカコ（４９）
○ツバサママ（４５）
○森川京子（５４）
○佐田久美子（７４）真澄の母。
○室井咲子（７４）京太郎の義母。

○同・同・リビング

慌てて席に戻り朝食を取る渉とさくら。

遅れて京太郎と京子が来る。

京太郎「もう、ちゃんと彼の言い分聞いてあげなよ」

京子「あのねぇ、私はちゃんと証拠を持ってるの。それなのに何で言い分聞かなきゃいけないのよ」

渉「おかえり」

さくら「お父さん。お帰りなさい」

京太郎「あぁ、ただいま」

渉「あれ、真澄さんは？」

京太郎「もう少し実家でゆっくりしてくるって。あぁもう疲れた」

ソファーに座り込む京太郎、京子が横に座り

京子「これよ！」

京太郎「（驚き）何！」

京子が見せた用紙はホテルの領収証。

京太郎「何だよこれ。ホテルの領収証じゃん」

京子「良く見なさいよ」
京太郎「ん？」
京子「二名ご宿泊、やらしいビデオまで見てんのよ」
京太郎「えぇ？（領収証を見て）あぁ本当だ」
京子「これが何よりの証拠」
京太郎「でも、彼が本当にこのホテルで過ごした証拠は無いんじゃない？」
京子「だめだ…アンタも男だから、そうやって斗馬の味方してたらいいじゃない！とにかく私は帰らないから」
京太郎「（うんざりして小声で）お願いだから帰ってくれよ」
京子「え？」
京太郎「何でもない」
さくら「一通り話が終わった所で」
京子「終わってないわよ」
京太郎「終わった終わった。どしたさくら」
さくら「お父さんが帰ってくる少し前に、おばあちゃんから電話ありました」

京太郎「え？咲子さんから？」
渉「もうすぐ、お母さんの…」
京太郎「そうだよな…」
さくら「いつ頃来るのか聞いてました」
京太郎「そうだな…今週末にでも皆で行くか。後でお父さん連絡しておく」
渉「ねぇ、お父さん」
京太郎「ん？」
渉「お母さんのお墓参り行く時なんだけど…真澄さんも連れて行ったらダメ？」
京太郎「はぁ？真澄さんは関係ないだろう」
さくら「関係なくはありません。私達は真澄さんに助けられ、もう家族同様みたいなものなのです。それでもう言っちゃいました」
京太郎「言った？何を？」
渉「おばあちゃんに、真澄さんも連れて行くって」
さくら「おばあちゃんは、快く承諾してくれました」
京太郎「ちょ…」

京子「まぁ、いいじゃない。人が多い方が凛ちゃん喜んでくれると思うよ」
京太郎「また勝手な事を…そうは言ってもな、真澄さんが来るかどうか（分からないだろ）」
暗転、

○同・同・玄関・中（朝）
旅行鞄を持った真澄が入って来る。
字幕「一週間後」
真澄「おはようー。入るぞー」
中に入っていく真澄。

○同・同・リビング（朝）
真澄が来る。
真澄「おはよー」
さくら「おはようございます」
渉「真澄さん、おはよう」
真澄「おぅ。二人共おはよう」
京子「ねぇねぇ真澄さん」

真澄「どうしました？」
京子「斗馬…どうしてる？」
真澄「いや。今あいつ違う人担当してるみたいで、会ってないんですよ」
京子「そうなんだ…」
真澄「あれ？やっぱ気になります？斗馬の事」
京子「んな訳ないでしょ。あの浮気男、絶対に許さないんだから！」
　支度した京太郎が部屋から出て来る。
京太郎「準備出来たぞ。行くか（京太郎を見て）あ、やっぱ行くんですね」
真澄「行くんですよ」
京太郎「…」
真澄「折角さくらと渉が誘ってくれたのに断るバカどこに居るんだよ」
　京太郎が真澄に近付き、真澄の顔を凝視する。
真澄「何だよ？」
京太郎「どこに居るんだって言うもんで」
真澄「はいはいどうぞ。好きに言って下さい。

俺は何て言われても言い返さないし怒らないので」

京太郎「言っときますけど、その言葉信用してませんからね？」

真澄「は？」

京太郎「貴方ね、以前に俺は怒らないし、つっかからないって言っておきながらですよ。舌の根も乾かないうちに怒って、突っかかってきてたじゃないですか」

真澄「そんな昔の事、良く覚えてるな」

京太郎「昔の事って、半年前でしょうが。あ、もう半年前の事も思い出せないお歳になられましたか…あぁこれはこれは」

京子が来る。

京子「二人共、いい加減にしなさいよ」

京太郎・真澄「…」

○車・中

京太郎が運転し助手席に真澄、後部座席に渉、さくら、京子が乗っている。

真澄「車乗ると思い出すな」
京太郎「何をですか？」
真澄「京ちゃんの運転が下手で事故起こしそうになったし」
京太郎「何言ってんですか。あれは貴方が横から茶々入れてうるさいから積載車に乗り上げてしまったんですよ」
真澄「すぐ人のせいにする。死ぬまでそうやって人のせいにするんですね悲しい人生です」
京太郎「貴方も死ぬまで素直に認めない人生送るんでしょうね。悲しい人生ですね」
後部座席で、京子、渉、さくらが困惑している。
止まらない京太郎と真澄の口喧嘩。

○神奈川・鎌倉の風景

○道

京太郎達が乗った車が来る。

古きながらも趣のある古民家（室井家）の前に着く車。
京太郎達が降りて来る。
真澄「あぁ、事故に遭わずに済んでよかった」
京太郎「（小声で）うるせぇよ」
渉「おばあちゃん家に居るかなあ？」
さくら「早く行ってみましょう」
渉とさくらが家に行こうとすると
女の声「渉―さくらー」
渉とさくらが声の方を向くと、両脇に野菜を抱え笑顔で歩いて来る凛の母、室井咲子（74）。
さくら「おばあちゃん！」
咲子「あぁ、皆よく来たね。丁度畑から帰って来た所でタイミング良かった」
京太郎「咲子さん」
咲子「あぁ、京太郎さんいらっしゃい。もうその呼び方は止めてよ。お母さんでいいのよ」
京子「そうよ。私はママって呼んでるわよ」

咲子「ほんと、娘はもう京子ちゃんだけになったからそう言ってもらえると嬉しいわあ」

咲子が真澄を見てるのに気付く京太郎。

京太郎「あ、お義母さん。こちらお隣の佐田真澄さんです」

真澄「どうも。何か家族でもないただの隣人なのが着いてきまして…」

咲子「あぁ、こちらが真澄さんなのね」

真澄の所へ行きわきに抱えていた野菜を地面に置き握手をする咲子。

真澄「え？」

咲子「話は、渉とさくらに聞いてます。二人を助けてくれたみたいで」

真澄「（照れて）いやぁ」

咲子「京太郎さんとも、良い感じだとか」

京太郎「ちょっとお義母さん。その言い方だと何か俺と真澄さんがいい仲になってるみたいで」

咲子「まぁまぁ立ち話もなんだから早く家に入って頂戴」

真澄「お邪魔します」
家に入っていくさくら、渉、京子、真澄。
京太郎「話聞いてないし…」
地面に置いたままにした野菜を見る京太郎。
京太郎「野菜持って行くの忘れてるし…」
野菜を抱え家に入っていく京太郎。
京太郎「重たいな…」

○同・中・居間（夕）
京太郎、真澄、渉。
真澄「随分広い家なんだなあ」
京太郎「お義父さんが頑張って建てた家なんですよ。一人娘で婿が来てこの家を継いでいって欲しいって思いを込めて建てられたらしいんだ」
真澄「それを、京ちゃんが奪って行ったの？」
京太郎「奪って行ったって。言い方がまた」
真澄「だってそうだろ？京ちゃんがこちらに

婿養子に来たわけじゃないのに」
京太郎「まぁ、そりゃそうだけど」
真澄「じゃあ、奪って行ったんじゃん」

○同・同・キッチン（夕）
夕飯の支度をしている京子、さくら、咲子。
咲子「よし、これで出来上がりねえ」
京子「あぁ、美味しそう。ママの野菜の天麩羅絶品なのよねえ」
さくら「私は、おばあちゃんが作った唐揚げが大好きです」
唐揚げが入った器を持ち上げるさくら。
言い合いをしている京太郎と真澄の声が聞こえて来る。
京子「もうまたやってる。暇さえあれば二人で喧嘩してるんだから」
渉が来る。
渉「また始まったよ」
さくら「でも、あのお二人は、あれで通常運

転ですから」
咲子「ほんと、あの二人仲がいいわね」
京子「でも、ママ毎日のように聞いてたら鬱陶しくもなるわよ」
咲子「（笑って）まぁそれも分かるけどね。・さっ、これ持って行きましょ」

○同・同・居間（夕）
咲子、渉、さくら、京子がおかずの入った器を持ってくる。
言い合いをしている京太郎と真澄。
咲子「はい。喧嘩はこの辺で一旦ストップして、ご飯食べましょう」
京太郎「一旦ストップですね。続きは後程」
真澄「望む所だ」
×　×　×（時間経過）
それぞれが楽しく食事を取っている。
京太郎「お義母さん、いつも美味しい食事有難うございます」
咲子「いえいえ、私年に一回この日が本当に

楽しみなのよ。だからお料理も頑張っちゃう。凛はもう居ないけど…こうして皆が来て顔を見せてくれて本当に嬉しい」

京太郎「凛の命日にはちゃんと顔出すって約束ですから」

咲子「ありがとう」

さくら「明日、皆でお母さんのお墓参りしましょうね。真澄さんも」

真澄「お、おぅ」

咲子「はいはい。まだまだたくさんあるからお腹いっぱい食べて行ってね」

○同・同・廊下（夜）

風呂上がりの真澄が来る。

咲子が来る。

咲子「あぁ」

真澄「お風呂頂きました。ありがとうございました」

咲子「いえいえ」

真澄「家族でもない私が…」

咲子「でも、家族のようなものでしょ」
真澄「え？」
咲子「きっと凛が、京太郎さん一人じゃ淋しいだろうから、真澄さんを連れて来てくれたのかもしれないわね」
真澄「はぁ」
咲子「でも、凛は結構なヤキモチ妬きあから、女性じゃなくて男性を連れてきたのかもしれないわね」
　クスッと笑う真澄。
真澄「でも、俺ゲイですよ？」
咲子「あ、そっか（笑って）」
真澄「だから、男性連れてきても安心とは限らないですよ」
咲子「あらま！それじゃあ凛ったら、うっかりしちゃったわねぇ（笑）」
真澄「ふふっ、そうですね」
咲子「でもね、真澄さん。誰を好きでもいいのよ。京太郎さんが笑顔でいてくれれば、凛も私もそれが一番嬉しいの」

真澄「…」
咲子「これからも宜しくお願いしますね」
真澄「はい」

○同・二階・客室・中（夜）
京太郎、真澄、渉、さくら、京子が布団を並べて寝る準備をしている。
真澄「何かこういうの良いな。皆で並んで寝るやつ」
京太郎「今の時代。こうやって並んで寝るってあまりないですからね」
渉「これが、一番の楽しみだったりするもんなあ」
さくら「皆で眠りにつくまで色々話をするのが楽しみでした」
京子「明日は皆で凛ちゃんのお墓参りだよ。そろそろ電気消すわよ」
真澄「あの、隣で寝るけど、鼾や足で蹴とばすとか止めてくれよ」
京太郎「良く言いますよ。蹴とばすのは貴方

の方ですよ。あぁ何で隣にしたんだ。姉貴と場所変わって下さい」

真澄「もう毎回うるさいなあ。寝てしまえば分からないんだよ」

京太郎「そりゃ人蹴とばしておいて自分は熟睡してるからいいでしょうけど、こっちはそのせいで目が覚めるんですよ。それからまた寝付くのに時間がかかるんですよ」

真澄「年寄りだからじゃねぇの？」

京太郎「本当に口の減らない人だなあ」

枕を真澄に投げつける京太郎。

真澄「痛っ。口で勝てねぇからって、武器使うのは無しだぞ」

真澄も京太郎に枕を投げる。

京太郎「痛っ！やりましたね…ついにやりましたね。私に火を点けましたね！」

京太郎が投げた枕が真澄をかわし京子に当たる。

京子「ちょっと、何で私に投げるのよ！」

京子も枕投げに参戦する。

渉「ちょっと何やってんだよー、いい大人達が」

京太郎「渉！この枕投げの戦いに子供も大人も無いんだよ！」

さくらがどさくさに紛れて京太郎に枕を投げつける。

京太郎「おい、さくら！お父さんにぶつけてどうするんだ！ぶつけるなら（真澄を指さして）こっちだろ！」

真澄「何言ってんだよ。さくらは俺の味方なんだよ！（枕を投げる）」

京太郎「さくら！こんなひねくれた口の悪い隣人の肩を持つなんてお父さん許さないぞ！」

京太郎が枕を投げると、真澄が屈み、襖を開けた咲子の顔に当たってしまう。

静寂。

京太郎「あ！お…お義母さん…」

咲子「近所迷惑になるし、そろそろ寝ましょ

うね」

咲子の顔は笑っているが、それが逆に怖い。

京太郎「はい…すみません」

笑顔のまま襖を閉める咲子。

渉「お父さん。ヤバいよ。あのおばあちゃんの顔」

さくら「あれは相当怒ってますね…」

京太郎「寝よう」

慌てて電気を消し、布団の中にもぐり込む京太郎。

○鎌倉・墓地

京太郎、咲子、渉、さくら、真澄がりんの墓の前で手を合わせている。

京太郎M「凛…そっちで元気にやってるか？今年も家族皆でここでお参りできて本当に良かった。今年は、お隣さんも一緒に来たけど…空から俺達を見守っててくれ。そして来年もここで皆とここに来られるように」

目を開け、凛の墓を見上げる京太郎。
その目にうっすらと涙。

○室井家・前

帰り支度をした京太郎、真澄、渉、さくら、京子。
見送る咲子。

京太郎「じゃあ、お義母さんまた」
咲子「はい。また来年待ってるわね。あっても来年、夏位に高校の時の同窓会東京でやるの。その時はそっちにも顔出すわね」
京太郎「あ、そうなんですね。その時は是非寄って下さい。居お待ちしてます」
さくら「おばあちゃん、待ってます」
渉「俺も、待ってるよ」
咲子「渉も、さくらもありがとう」
京子「ママ。また来る空元気で居てね」
咲子にハグする京子。
咲子「（優しく抱きしめ）うん。待ってるわね」

真澄「本当にありがとうございました」
咲子「真澄さんも、また来年みんなと一緒に来て下さいね」
真澄「はい」
京太郎「それじゃ」
車に乗っていく京太郎達。
車が発進し笑顔で手を振り見送る咲子。

○車内
京太郎が運転している。
隣に真澄。
真澄「咲子さん、良い人だな」
京太郎「気にいって頂けたようで良かったです」
フッと笑う真澄、京太郎も笑う。

○マンション・森川家・リビング～廊下
字幕「十二月」
渉が引っ越しの為に荷物を出している。
京太郎やさくらも手伝っている。

渉「荷物はこれくらいかな」
京太郎「思ったよりも無かったな」
渉「部屋にあるの持って行くだけだし、最低限のものは、ツバサママがプレゼントしてくれるって」
京太郎「物件まで紹介してくれたのに、何だか悪いな」
渉「その分、お店で頑張るから」
さくら「お兄ちゃん」
渉「ん？」
さくら「一人暮らししても頑張って下さいね！少し寂しくなりますが…」
渉「（笑って）淋しくなるって、引っ越し先新宿だぞ十分位でこっちに帰って来れるのに」
さくら「そうですけど、この家に居たお兄ちゃんが居なくなるのは、ちょっと寂しいです」
渉「ちょっとなんだ」
さくら「え？」

渉「いや、何でもない」
京太郎「渉。いくら距離はそこまで離れてないとはいえ、初めて一人暮らしするんだぞ。くれぐれも注意して。世話してくれたツバサさんに迷惑かける事無いようにな」
　真澄が来る。
真澄「おぅ、準備は済んだか？」
渉「はい！」
京太郎「準備は済んだかじゃないですよ。手伝うって言っておきながら終わった頃に来るんですから」
真澄「渉が、いいって言うから」
渉「そう。だからお父さんの言う事は聞き流しといていいから」
京太郎「渉！」
渉「じゃあ、俺そろそろ行くから」
真澄「おぅ」
渉「お父さん。俺も一人暮らしを始める年になりました。ありがとうございました。そしてお世話になりました」

頭を下げる渉。
渉を見て涙ぐむ京太郎。
引っ越しトラックのクラクション。
渉「あ、呼んでる。じゃあ…また夜に」
走って、エレベーターに乗り込んでいく渉。
渉を見送る、京太郎、さくら、真澄。
真澄「よし、今夜はブルースカイで飲むぞー！京ちゃんもだぞ！」
京太郎「出た。巻き込まないで下さいって何度も言ってるでしょ。今日はねさくらも行くんですからね。飲むのならゲイの皆さんで飲んで下さい！」
真澄「面白くない男だ」
京太郎「またその話ですか？いいですよ。今夜こそ決着つけましょうよ。私は面白くないんじゃない。真面目に当たり前の事言ってるだけですから！」
さくら「お父さん」
真澄「さくら、大丈夫だ。俺が、潰すから！」

京太郎「その言葉忘れないで下さいね！」

○二丁目・「ブルースカイ」・前（夜）

ドアに「本日貸し切りです」と紙が貼られている。

○同・同・中（夜）

カウンターで京太郎、さくら、真澄が座っている。

中でツバサに見守られながら渉がドリンクを作っている。

完成し京太郎達の所へ持って行く渉。

渉「まずはさくら」

さくら「はい」

渉「名前から、桜色のシロップを炭酸で割ってみた。もちろんノンアルコールだから」

さくら「ありがとうございます。何だか大人になった気分です」

渉「はい、お父さんにはバイオレットフィズ」

京太郎「おぉ、有難う。何か大人のお酒って

感じだな」

真澄「渉。中々いい感じの作ったぞ。飲む人に合わせて作られてる」

京太郎「そ、そうですか？（嬉しい）」

真澄「気味悪い色な所がお父さんそっくりだ」

京太郎「は？」

ツバサ「もう少し、リキュール薄めてもよかったかもね」

渉「はい。気を付けます」

京太郎「渉が、初めて俺に作ってくれたお酒かぁ…。父さんちゃんと飲むぞ」

渉「ありがとう。それでこれが真澄さんの」

カルーアミルクを真澄に出す渉。

真澄「おぉ、有難う」

京太郎「何ですかこれ。カルーアミルクじゃないですか」

真澄「あぁ。そうだよ」

京太郎「（噴き出して）そんな子供っぽいもの飲むんですか」

真澄「いつも、ビールや焼酎ばっかだから。

たまには気分を変えてだよ」
京太郎「あぁ、でもいお似合いですよ」
真澄「そうか？（ちょっと嬉しい）」
京太郎「いかにも子供っぽい飲み物で」
真澄「は？」
京太郎「うるさいからそれ飲んで大人しくしてて下さいね」
渉「もぅ、お父さん」
真澄「ツバサ。テキーラ用意して」
ツバサ「えぇ？」
真澄「潰す絶対に潰す」
京太郎「望む所ですよ」
タカコが入ってきて、続けて京子と斗馬も入って来る。
ツバサ「あら、タカコも来たわー」
タカコ「遅くなってごめんなさい。あのこちらの方達が、ここ探してたので連れてきたんだけど…」
京太郎の目が見開く。
京太郎「何で、ここに？しかも二人で？」

京子「あぁ、やっとここに来られた。ちょっと京太郎、何で私を誘わないのよ？」
京太郎「いや、ちょ、ちょ…ちょっと待って。だから何で二人が一緒に居るの？別れるんじゃなかったの？」
タカコ「ってか誰なのこの人達」
ツバサ「さぁ」
真澄「京ちゃんのお姉さんと、俺の編集者」
ツバサ・タカコ「えぇっ！」
京子「あぁ、あれ？あれ、私の勘違いだったみたい」
京太郎「はぁ？」
斗馬「社内で人とぶつかって書類を落とした時に紛れ込んだみたいで、そのまま鞄に入れて家に持ち帰っちゃって…それ真澄さんに行ったら今日皆でここで飲む事になったから二人で来いって」
うんざりした顔の京太郎。
京太郎「もう、余計な事を」
京子「余計な事って何よ！私も家族なんだか

らね」

真澄「京ちゃん…もうこれは逃れられない運命なんだよ」

京太郎「うるさいよ！」

ツバサ「まぁまぁまぁまぁ。これで皆揃ったって事でしょ？皆で乾杯して今日は盛り上がっちゃおうよー！どうせ貸し切りなんだし」

京子「そうよねぇ！たまにはこういう日だってなきゃやってらんないわよねー！」

京太郎「たまにはいいかもしれないけど、アンタはしょっちゅうなんだよ」

真澄が京太郎の前に、テキーラの入ったショットを置く。

京太郎「何ですか？これ」

真澄「何ですかって、忘れてないだろうな。俺との勝負」

京太郎「別に忘れてないですよ。誰もテキーラで勝負するとは」

真澄「何だっていいだろ」

さくら「お兄ちゃん。これはお父さんまた潰されますね」

渉「負けるくせに、いつも挑むよな。さくら、安心しろ。今日はうちに泊まっていけよ」

さくら「そうさせてもらいます」

真澄「勝負はいい？」

京太郎「望む所ですよ」

同時にテキーラを飲み干す京太郎と真澄。

京太郎「くぅっ！」

真澄「やっぱ俺にはこっちの酒のが合うな」

お代わりして飲み始める京太郎と真澄。

二人を応援している京子と斗馬。

盛り上げているツバサとタカコ。

引き気味ながらも楽しんでいる渉とさくら。

京太郎M「どうしていつもこうなるのか…心穏やかに過ごしたくてもいつもこんなオチになる。周りの連中も成長しないが、俺も成長してないんだろうな…だからこうなる

んだろうな…いい加減うんざりするけど…
こんな展開嫌いじゃないんだろうな…」

○新宿二丁目の街並み。
京太郎や真澄達が騒いでる声が響き渡る。

終。